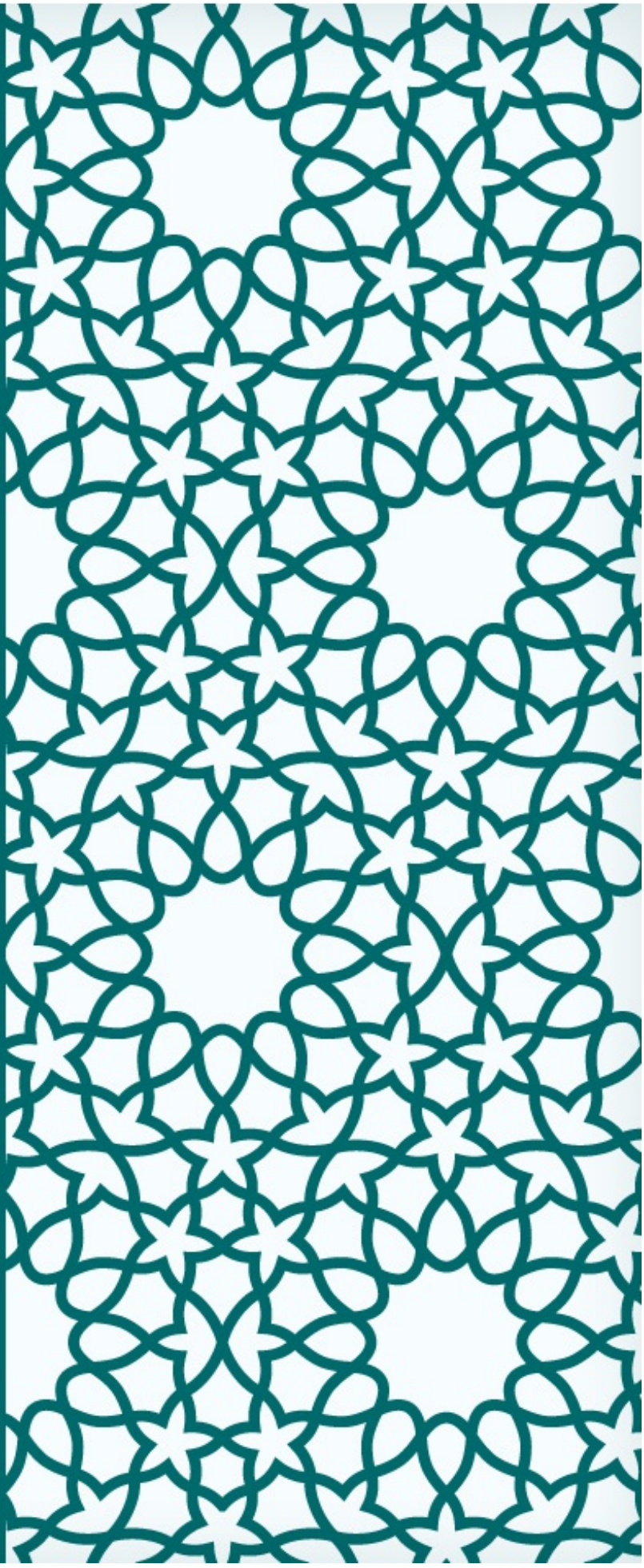
拓也、危機一髪！

春日信彦



さやかはアンナのためにバク乳を使ったお芝居を考える。拓也はバク乳に誘惑されてしまうの

アンナの願い

「子供のことだけど、やっぱし、ほしいな～」ソファーのアンナはバク乳を抱えプーさんにおっぱいを飲ませている。「思い切って、子どもつくれば」ベッドにうつぶせのさやかは、推理小説を読みながら答える。「相手がうんと言わなきゃ、しょうがないし」アンナはバク乳でプーさんをしばく。「それはそうだけど、なせばなると言うじゃない。拓也にこだわらずに、誰かとつき合ったら」さやかは読んでいた本をパチンと閉じる。

「恋愛とか結婚はしたくないの。種だけほしいの」アンナの切ない声。「だけど、どうやって？」さやかはあきれた顔でソファーに飛んでいく。「だから、さやかに相談してるんじゃない」アンナはプーさんをベッドに放り投げるといつもの美容体操を始める。「アンナは、無茶よ。とにかく、少しでもいいからつき合うのよ。子供ができたら、トンずらすりゃいいじゃない」さやかは自分の名案にニコッと笑顔をつくる。

「そんなに簡単に男が見つかるはずないでしょう。どうやって見つけりゃいいのよ」アンナは大きく両腕を広げて上半身を左右にひねる。バク乳がブルン、ブルンと風を起こしてワイパーのように左右に揺れる。「そう、結婚相談所って言うのがあるわ。一か八かやってみれば」さやかも起き上がると前に立ってアンナのまねをする。「結婚はしないって言ったでしょう。何度言わせるの」アンナは軽くジャンプする。アンナのバク乳がドスン、ドスンと上下に揺れる。さやかもまねてジャンプする。さやかのヒン乳がプルルンと揺れる。

「だから、結婚する振りをして、つき合って、できたとわかったら、トンずらするのよ」さやかは自分の話に酔っている。「え〜、変な詐欺。そんなのあり？」アンナは両手を腰に当てると大きく上半身を後ろに反る。アンナのバク乳はこぼれ落ちるように左右の脇にだらんと垂れる。「しかし、ほかにどんな方法があるって言うのよ」さやかはふくれっ面でソファーにジャンプする。「まあね、結婚相談所か。だけど好みの男に出会うって保証はないのよ。いつまでたっても、イモとかカボチャばっかりだったらどうすんのよ。お人よしで、かわゆくて、拓也のような人いるかな〜」

ソファーに腰掛けたアンナは拓也のことを思ってぼんやりと微笑む。「いるはずないでしょ、アンナったら」さやかはアンナのバク乳をギュ〜とわしづかみする。「イタ！だから、拓也しかいないって、言ってるの」アンナはヒン乳の小さなとんがりをつまむ。「何すんのよ、ダメよ、拓也は」さやかは突然立ち上がる。「さやかが決めつけることないじゃない。頼んで見なきゃ、わかんないでしょ」アンナは腕組みをしてさやかを睨みつける。

「ダメったら、ダメ」さやかの顔は真っ赤になる。「さやかは協力するって言ったじゃない。嘘だったの」アンナも立ち上がり上からさやかを睨みつける。「拓也以外だったらのことよ」さやかも下から睨み返す。「まさか、やきもちやいてるの？」アンナはあきれてフリッジにビールを取りに行く。「そうじゃなくて、拓也は二人のものじゃない。私にも権利があるってことよ」さやかはソファーであぐらをかく。「さやかも子供ほしけりゃ、拓也の種、ゲットしたら。アンナはかまわないけど」

「さやかは男としたくないの、わかっているくせに」さやかはプーさんをアンナに投げつける。「さやかったら！こうなったら、アメリカ本国行きの旅費と種の購入代、出すとすっか。それだったら、文句ないでしょ」アンナは喉を鳴らして缶ビールを飲む。「アメリカ本国ね〜、チョット待ってよ。気持ちの整理がつかないわ」両手を頭の上に置いたさやかはベッドに戻り腰掛ける。

「精子バンクは、世界中から優秀な精子を集めているって。しかも、プロフィールつきだから、自分の気に入った種が買えるらしいよ」アンナは雑誌に書いてあったことを思い出して言った。「ほんとーに、お金出してくれるんでしょうね」さやかはその気になってきた。「嘘を言うと思う、さやかったら」アンナはさやかの気持ちが動いたのを察して笑顔をつくった。「わかったわ！拓也の種、もらっていいわ」さやかはアンナの後に引かない強情さに負けた。

「いいわって言われても、拓也が簡単にくれるはずないと思うのよね。さやかも、そう思うでしょ」アンナの悲壮な顔。「そうよ、やっぱし無理よ。あきらめたら」さやかは冷たく返事すると読みさしの本を開いた。「あきらめないからね、必ずゲットするから」鋭い目つきでビールをグイっと飲む。「どうやってゲットすると言うの、拓也の性格わかっているでしょ」さやかもビールの缶を開ける。

「拓也も男だし、魔がさすってことも・・」アンナは自分のバク乳とエロに自信を持っている。「確かに、それは言えるわね。アンナのバク乳とエロで誘惑すれば、もしかして、ゲットできるかもね！」さやかはやけくそ。「それじゃ、どうやって誘惑するかだな。第一、アンナとなんかデートしないし～。誘惑しようがないか！」アンナは商売道具のバク乳を持ち上げてじっと見つめた。さやかはバク乳を見るたびにムカつくが、この際、このバク乳を使ったお芝居を考え始めた。

「そこを考えるのよ、まず、アンナと拓也が二人っきりになることができなければ、無理でしょ」さやかはシェークスピアになっている。「そうそう、さやか、さえてるじゃん。それで」アンナは子供のように大きく頷く。「まず、アンナを大金持ちのお嬢さんに仕立て上げるの」さやかはいつもの妄想に入り込んでしまった。「それは無理よ、中学校もまともに行ってないのに」アンナはお嬢様が大嫌いだった。

「大丈夫だって。アンナは妾の子で、本当の父親は大金持ちということにするの」さやかの作り話が始まった。「なるほど、それで」アンナはその気になってしまった。「病弱な母親を助けるために、高校卒業後はＳデパートで働いていることにする。どう～？」さやかはシナリオに酔っている。「いいけど、今やっていること聞いたら、気絶するかも」あまりにも現実離れした話にあきれている。

「アンナはさやかのシナリオ通りにやればいいの」さやかは先生のような口調で言う。「わかったよ」アンナは両手を両膝の上に置いてまじめな顔。「それで、実の父親が罪滅ぼしに面倒を見てくれることになったことにする。だから、靴も、服も、持ち物すべて上品なものに替えてしまうの。いい、これからが勝負よ。お父様の別荘が軽井沢にあるのね、そこに三人で遊びに行くの」さやかの目が輝いている。

「別荘なんか、どこにあるのよ」アンナの目が飛び出してきた。「心当たりがあるのよ」さやかはにんまり笑う。「そうなんですか。それで」アンナは今まで話した事がないような丁寧な口調で、相づちを打つ。「ぜひ、有名な先生に使っていただきたいと、お父様が申しておりますと、さやかが拓也に言う」さやかは自分の出番に心がウキウキ。「やってみましょうか、それで」アンナはさやかの肩をギュッと抱きしめる。

「うまいこと言って、拓也を別荘に連れて行く。夕食後、最高級のブランディーを飲みながら絵の話を持ちかける。ほら、拓也って印象派の絵の話が好きでしょう。話しているうちに、飲みすぎると思うのよ。そこで、酔い始めたら、さやかが急に吐き気を催して部屋を飛び出していく。後は、アンナの出番って言うわけ。すばやく、浴衣を脱ぐ、男を虜にする甘いローズの香水、揺れるバク乳、鼻血が飛び出すような赤のTバック、そこで、優しく介抱しながらギュッと抱きしめる。拓也は酔っているから、アンナの肌に触れればきっと手が出ると思うの、どうかしら？」自信満々のさやか。「おもしろそうね、やってみますか！」バク乳でさやかの顔をはさむ。

拓也の正夢

赤のＴバックビキニのアンナ
ピンクのフレアスカート水着のさやか
コーヒーカップに乗ったさやか、アンナ、裸の拓也たち
ジェットコースターを見下ろしながら
風を切って青空を飛ぶ

「タクヤってば！彼女いないの？つき合っている人いないの？」アンナがいつもの調子で機関銃を向けた。「いない」あわててあそこを隠して答える拓也。「大変ね！」アンナが笑う。「別に」とあっちを向く。「男の人って、溜まるんでしょ、うふふ・・」アンナは拓也のあそこを覗く。「一人でやってるよ」拓也が冗談を言うと、「あらま、寂しくない？」アンナはまた、あそこを覗く。

「アンナさん、結婚はどうですか？」と訊ねると「年金ホームに入ったころにでもね」笑いたくても笑えない返事。「子供はほしくないの？」とアンナに訊ねたところ、「ほしいよ」と言うので「すぐに、結婚しなさい」と父親のような一言。「子供はほしいけど、男はほしくない！」と理解に苦しむことを言うので、「アメリカ本国に行けば、自分の好きな種が買えるらしいよ」と冗談のパンチ。

「種は買いたいけれど、日本人のも売っているの？」アンナはマジに言う。あきれた拓也は「当然だよ」といいかげんな事を言う。「今、ほしい種があるんだけど」とアンナは拓也のあそこをじっと見つめる。「だったら、買いに行けばいいじゃないか」と言ったところ、「まだ売ってないのよ！」笑って叫ぶ。「早く発売されるといいね」と拓也が無責任なことを言ったところ、「発売はムリみたい」とアンナの悲しそうな顔。

「だったら、あきらめる以外ないね」と意地悪を言う。「子供はかわいいね、アンナ、産みなさい。応援するから」突然、わけのわからない援護射撃をするさやか。「お願いすれば、売ってくれるかも？」異様な笑顔を発射するアンナ。「買うことばかり考えずに、恋をしなよ」ともっともらしいことを言うと、「恋も、愛もいらないの」とアンナのしらけた返事。「それじゃ、永久に種は手に入らないな」と男の意見を言ったところ、「心当たりがあるの！」また、アンナは拓也のあそこをじっと見つめる。

「どこだ？」真っ白い部屋。眼鏡のせいか？いや・・・とにかく白の空間。「いったい、誰のいたずらだ」僕も真っ白。「え！」真っ裸。「これは許されん。おーい！出て来い、いたずらっ子。おーい！」声までも真っ白。あんなところに人の白い線が浮いている。動くぞ。男か？女か？あれは見知らぬ男。他にはいないのか？「あいたた！」しりもちついたじゃないか、と言うことは僕も浮いていたわけだ。

まあ、いいや、だれかいるだろう」廊下に出て、隣の部屋をノックする。「どうぞ」女の声。「失礼」ほんの少し開けて、中を覗き込む。「コンチワ」ドアを大きく開ける。「お！真黄色！」あたりを見渡すと、部屋の真ん中に白いベッドが一つ。「どういうことだ」ベッドに三歩近づくと、ベッドが三歩遠ざかる。「あれ！」いつの間にか、黄色の自分が白いベッドに大の字になって寝ている。

しかも、ベッドに両手両足が縛られている。「どうしたんだ？」自分の声が聞こえない。急いで指を耳の中に突っ込む。「え、まさか！」ベッドの横にアンナそっくりの女。「アンナか？」大声で叫ぶ。まったく自分の声が聞こえない。ベッドに寝ている黄色い自分が何か叫んでいるが、まったく声は聞こえない。アンナらしき女がじっと黄色い自分のあそこを見つめている。女はにやりと笑うとそそり立った黄色い棒をぎゅっと両手で握り締めた。

拓也、危機一髪

今日は別荘に行く約束の日である。足は重たいが開き直って出かけることにした。タクシーを拾うとさやかたちのマンションに向かった。ドアの前に立つとなぜか気分は晴れていた。インターホンに指を置き、すぐにノブを回すと鍵は解除されていた。ドアを開けると甲高いかわいい声が拓也の耳に飛び込んできた。さやかは異常にウキウキしている。「拓也、今日は小雨みたい。だけど、大雨にはならないそうよ。良かったわ」今まで見せたことのない異様な笑顔を拓也にぶつけた。

「タクシーがもう来るわ、降りましょう」さやかは拓也をせきたてた。タクシーに乗ると、後ろの二人は拓也の興味を無視した新人ＡＶ女優の話題で休むことなくさえずっていた。拓也は印象派の絵が飾られていると言う別荘のことを考えていると、いつの間にか眠ってしまった。「あそこね、あそこの大きな和風の建物。運転手さん、そこで降ろして。拓也、着いたわよ」さやかはカードで支払うと現金でチップを渡した。

三人は車を降りると、旅館のように大きな建物に足がすくんだ。「デカイ、あ、大きいわね」アンナは丁寧な言葉に言い換えた。つつじを両袖にした約５０メートルはある道の先に、小さな冠木門が見えた。建物を護衛するように周りを取り囲んだ白い壁を眺めながらしばらく歩いて行くと、桂小五郎と書かれた高級な表札が冠木門の脇にあった。「お父様は、桂小五郎さんと言うんだね」拓也は歴史に出てくる名前と同じ事に気づき小さく頷いた。

「あー、そう、小五郎」アンナは突然の質問に戸惑う学生のように目を大きくして答えた。冠木門から約３０メートル歩くと、竜が彫刻された二本の柱を両脇に従えた、重々しい玄関にたどり着いた。左手には竜安寺を思わせる枯山水の庭園が静かに広がっていた。玄関の中に入ると旅館を思わせる広々とした空間が三人を包んだ。

右手を見ると、壁には長さ１５０センチはありそうな大きな油絵がかけてあり、絵から飛び出しそうな艶かしい白人の裸婦が誘惑するような眼差しで微笑んでいた。正面上部の絵を見ると、沐浴している少女たちのみずみずしいピンクの肌が拓也の目に飛び込んできた。真正面には大きなガラスのドアがあり、そこから小鳥のために作られたような小庭園が静かに眠っていた。純日本風建築に白人の裸婦の油絵を見せつけられた拓也は、小五郎氏の心の大きさを感じた。

「広い！旅館みたいね」アンナはバク乳を跳ね上げながら踊り場ではしゃいだ。「さあ、各自の部屋を決めましょう。部屋はいくつあるのかな？広い廊下ね、幅３メートルはあるかしら。左手を見てみるわね、ここに、和室が三つ、１５畳、２０畳、３０畳、隣は茶室かしら。右手は、洋間が４つ。こっちはリビング、５０畳はあるわね。ワ～、素敵なシャンデリア。その奥は、キッチン。それに、ここがバス。泳げるほど広いわよ」

二人は新築の家に初めて入る子供のように、時々、歓喜というより悲鳴を上げている。「僕は和室でいいよ」拓也はしばらく、雪舟の「秋冬山水図」が描かれた掛け軸に見入っていた。「それじゃ、私たちは洋間と言うことで、決まりね。お昼は蕎麦にしましょう。拓也、いいかしら」二人はバッグを持ってさっさと奥の洋間に駆けて行った。

拓也は掛け軸を眺めていると、父親を思い出した。父親は水墨画が大好きで、日曜日には墨をすり、お縁に腰かけ、庭の小鳥や松の木を描いていた。蕎麦を食べ終わるころには小雨も消えていた。庭に出てみると、ヒヨドリに似た泣き声が遠くから聞こえてきた。さらに、通りまで出てみると、かわいい小川がフルートの音色に似た声で優しく歌っていた。

しばらく通りを上ると、雫をまとった木の葉はダイヤモンドの輝きを放ち、宝石の森を思わせた。右手を流れる小川の上では、そよ風にあわせて、笹の葉が何度もかわいくお辞儀をしていた。突然、脳裏に子供のころ遊んだ近所の友達が現れ、早く来いよ、とガキの良太の声が耳の奥で響いた。拓也は少し下まで降りて、靴を脱ぎ小川に足を入れた。冷たく、やわらかい小川の水を指先で感じると、水の流れに逆らって、両手で水を跳ね上げた。「お～い、良太、祐司、瞳」突然、名前が口から飛び出した。

３０分ほどして、桂邸に戻ると二人はリビングで甲高い声で笑っていた。「こんなにいい空気を吸ったのは何年ぶりだろ～」拓也は二人の会話に飛び込んだ。「拓也、どこほっつき歩いていたの、探したんだから」アンナは立ち上がると拓也の背中を押して席に着かせた。アンナはペットボトルの冷えたお茶をグラスに注ぐと拓也の前に置いた。拓也は一気に飲み終えるとどっと汗が噴出した。「拓也、シャワーどうぞ」アンナは浴衣を手渡した。

シャワーですっきりした拓也は和室に戻り、しばらく部屋の様子を眺めた。床の間の横には時価数百万はしそうな大きな花瓶が置かれてあった。「拓也、絵はどうだった？」アンナがビンビール２本とグラス、さやかは寿司を運んできた。「絵といい、置物といい、高級なものばかりですね。お父様は何をなされていらっしゃるのですか？」拓也はきっと大手商社の社長ではないかと思った。「ああ、コンピューター会社の会長です」アンナは教えられた通りに台詞を言った。

「そうですか、まったく素晴らしい」拓也は部屋を改めて見まわした。「拓也、乾杯しましょう」アンナは３つのグラスにビールを注いだ。夕食を終えるとアンナはブランディーのボトルとグラスを持ってきた。ちょっと用を済ませてからお邪魔するわね、と言っていつの間にか二人は消えてしまった。ビールを飲み終えた拓也は、ブランディーグラスを片手に床の間の前にある黒檀のテーブルに見入ってしまった。そこには光琳の「紅梅白梅図」と思われる金箔の絵が描かれてあった。

「拓也、いいかしら」浴衣に着替えた二人は拓也が好きなチョコレートを持ってやってきた。さやかの浴衣姿はかわいかったが、アンナは子供用の浴衣を着ているようで不釣合いだった。バク乳が浴衣に収まりきっていない。バク乳の谷間があらわになっている。「拓也、ベランダからの眺めがとても素敵なの、あちらにどうぞ」さやかはブランディーのボトルを手に取るとさっさと洋間に運んでいった。アンナはグラスをもぎ取り腕を組むと連行するように強引に引っ張っていった。

洋間のドアを開けると待ち伏せしていたかのように女性の甘い香りが拓也の理性を麻痺させた。中に入ると左手にはベッド、中央には前衛芸術家が作ったようなブルーとイエローのチェック柄の小さなテーブルとそれを囲むように３つの丸いソファーがあった。拓也がソファーに腰掛けると早速アンナがグラスを前に置いた。拓也は印象派の絵画について得意げに話しているうちにブランディーをかなり飲んでしまった。

ブランディーは好きだがお酒には弱く、酔うと寝てしまう悪い癖があった。拓也の瞼は限界に来ていた。拓也の左前には浴衣からこぼれだしそうなバク乳が揺れていた。拓也は半分開けていた瞼を閉じてしまった。「大丈夫、拓也！」アンナが声をかけたとたん、拓也はソファーから倒れ落ちてしまった。どうにか、ベッドに運ばれた拓也であったがすべての神経が眠ってしまった。

「さやか、どうしよう、飲ませすぎたみたいよ」アンナは拓也の意識がないのを感じ取った。「確かにね、こんなにお酒に弱いとはね。ここまでやったことだし、作戦実行と行きますか」さやかはバク乳にパンチを入れた。さやかは部屋の外で様子を伺うことにした。アンナは浴衣を脱ぐと拓也にまたがり、「拓也、大丈夫、起きて、和室に戻らなきゃ」アンナは拓也の顔面にバク乳を何度もこすりつけた。

拓也の瞼は貝のように閉じて手足も死んだように動かなかった。バク乳で顔を４，５回しばいたがまったく反応がなかった。とうとう、アンナはキレた。目を吊り上げたアンナは拓也のあそこにパンチを食らわした。だが、拓也は微動だにしなかった。拓也は歯を食いしばって痛みに耐えていた。